

ビブリア

No. 40

発行 いわき市平上荒川字長尾30
福島工業高等専門学校
編集 図書委員会
昭和55年10月17日

福島高専 図書館報

◇ 巻頭言 ◇

灯火親しむの候

副館長 工業化学科教官 小磯 武文

例年になく涼しい夏が終った。海や山に繰りだした若者の数も今年はそれほど多くなかったようだ。東京新宿の紀伊國屋書店の話ではいつも八月は本の売れゆきが悪いのに今年は別だったそうだ。おそらく東京の学生達も涼しい夏を利用(?) — いや、やむなくてあったのであろうが — して大いに読書にハッスルしたのかも知れない。ところで今年の夏休みは本校でも図書の貸出し数がとても多かったという。涼しい夏を予期してのことではなかったとは思うのだが大変に結構なことだ。

私もこの休み中に今の若い人は知らないが一昔前の青年達によく読まれたという「高橋和巳」を読んでみた。その中の一節にこんな文章があった。

人間の行為はどんなに強制されたものであっても最後の一点で自発性がなければ何事もできない。

——「日本の悪霊」——。

よい言葉ではないか。このような文章に接し深く自己をみつめるのも読書の効用というべきか。私は諸君が自己の問題を探し求め人生を変える一書にめぐり会えることを希っている。

時はまさに虫すだく秋、読書三昧 三更に至る……

そんな日々を過ごせる灯火親しむの候でもある。諸君の心の成長に絶好の秋(とき)である。

目

1. 巻頭言 (小磯武文) 1
2. 「ロマンの海」へのガイド (伊藤宏) ... 2
3. 「夏休みの読書」を顧みる 3
 - I 貸出しのWhoとWhat 3
 - II 課題読書(1,2,3年の一般教養)
 - (1) 読まれた顔振れ 4

次

- (2) 読み取られたあと 4
2年生全科・3年生C・土科
4. よもやまのはなし 12
5. 新着図書目録 13
6. 灯火に親しむべきの本 15
7. 読書感想文でアメリカへ? 15

「ロマンの海」へのガイド

工業化学科教官 伊藤 宏

地球の2/3を占める海。生物の源^{みなもと}と呼ばれる海。その海も、静かにそのベールを剥がされて来ています。

空に輝く星と共に、海は人のロマンの源泉です。人を、たやすく近づけない厳しさ。奥深く、秘められた愛。人は、そこにロマンを詩い、あこがれます。

海は、人類のあこがれの恋人。気高く由々しき存在。人は学び、悟り、発見し、海を現実の恋人にせんとしています。

海を開く。あなたも、神秘のベールに触れてみませんか。

絹よりもうすく、温かく、幾重にも……幾重にも……海は、あなたを迎えてくれるでしょう。秘めたる愛の力で。秘めたる愛の力で。

1. 海への道標

「海」 宇田道隆 岩波新書、380円(1969年、第一刷発行)。海洋学者(元東京水産大学教授) 平の書店にある。まじめな読者むき。

「海水の科学」 阿部友三郎、NHKブックス、(昭和50年、第一刷発行)。地球物理、(東京理科大学教授)。本校図書館にあり。教養をたかめたい読者にむく。

「海の地図と海底地形」 川上喜代四、古今書院 600円。(1971年第一刷発行)。地理、(海上保安庁)。本校図書館にあり。海図の歴史、日本近海図がポイント。

「海洋開発」 藤井清光、東京大学出版会、900円。本校図書館にあり。現在電気4年某君借出中にて著者など詳細不明。海洋国、日本の将来に希望を持つ者、一読すべし。

「深海底で何が起きているか」 小林和男、ブルーバックス(講談社) 540円。(昭和55年第一刷発行)。地球物理、(東京大学教授)。平の書店にある。おもしろく読ましてくれる。SFの読者は、特に読まれたし。

「海を守る」 宇田道隆 東京大学出版会 800円。

「海からの発想」 工藤昌男 東海大学出版会 980円。

「海洋の科学」 ウイラード・バスカム、吉田邦造・内尾高保訳 河出書房、980円、平の書店にある。

「海底の地図」 佐藤任弘 中公新書 400円、平の書店にある。

「海底の世界」 星野通平 東海大学出版会、980円。

「海底下の2億年」 P.ブリッグス・竹内 均訳 東海大学出版会、980円。

2. 海の人門書

「海洋開発における基礎構造物の現状」 工質工学会。I~V。本校図書館にあり。

「海洋エネルギー読本」 本間琢也、黒木敏郎、梶川武信、オーム社、2,900円、平の書店にある。

「海洋科学」 P.K.ワイル・杉浦吉雄、共立出版 3,200円。

「海洋環境の科学」 堀部純男 東京大学出版会 2,400円。

「海洋底地球科学」 小林和男 東京大学出版会 2,800円。

「海洋学講座」1~15巻、東京大学出版会 本校図書館に一部がある。

「海洋科学基礎講座」全12巻、東海大学出版会。

3. 海への定期便

「海洋開発」 ジャパン・インダストリアル・パブリッシング・季刊。

「Ocean Age」 オーシャン・エイジ、月刊。

「インスペース」 海洋開発研究所、月刊。

「季刊 海洋時報」 (財)日本海洋協会。

「海洋開発ニュース」 日本海洋開発産業協会 隔月刊。

附記 先生は、去る5月6日、世界的な「海洋技術会議」(USA. テキサス州ヒューストン)で、「太平洋深海底マンガンノジュールの製錬のプロセスについて」発表してこられた。

「夏休みの読書」を顧みる

I 貸出しのWhoとWhat

— 3年と電気工学科と工業技術部門

夏休中帯出分類別表

		在籍人	総記 0	哲学 1	歴史 2	社会 3	自然 4	工技 5	産業 6	芸術 7	語学 8	文学 9	計	(昨年)
1	M	39									1	3	4	2
	E	39	3				7	17		1	3	5	36	7
	C	39	2		2		8					4	16	3
	土	39	1	16	3	1	3					10	34	3
	計	156	6	16	5	1	18	17		1	4	22	90	15
2	M	41		1			1	1				17	20	0
	E	41	3				2	5				20	30	7
	C	39			1	2	13					14	30	9
	土	39	1		1		3	3			1	23	32	3
	計	163	4	1	2	2	19	9			1	74	112	19
3	M	40	2		1			4			4	1	12	18
	E	42	3	1	2	1	6	14		1	2	17	47	12
	C	41	2	16	2	4	14	2			3	3	46	14
	土	42	4	10			2	7			1		24	14
	計	165	11	27	5	5	22	27		1	10	21	129	58
4	M	41					3	4				3	10	3
	E	39			1		4	21			1	3	30	10
	C	43	1	1			32					5	39	13
	土	36	1	2	1		1	4			1	6	16	7
	計	159	2	3	2		40	29			2	17	95	33
5	M	37					3	20			3	3	29	18
	E	37	3		1		7	29			4		44	21
	C	36					7	10			1		18	14
	土	34	1				3	22			1		27	15
	計	144	4		1		20	81			9	3	118	68
総計		784	27	47	15	8	119	163		2	26	137	544	163
(昨年)				18	2	4	52	84		2	8	22		

(附言)

- 3年生までの総冊数は331で、昨年(92)の実に3.6倍に当たる。これは国語科(現代国語)で読書感想文を課したせいであろう。(詳細は後記)
それにしても、本とは強いられて読むばかりでも困るのだが。
- 冊数順にあげると、
 - 学年—3, 5, 2, 4, 1(昨年53421)
 - 学科—E(187冊), C(149), 上(133), M(75)
 - 部門—工技・文学・自然・哲学(昨年工・自・文

哲)

- 学級単位でベスト・ワーストをあげると、

N.1	3E(47冊)	N.16	1C(16)
2	3C(46)	16	4(16)
3	5E(44)	18	3M(12)
4	4C(39)	19	4M(10)
5	1E(36)	20	1M(4)

学年の重点、学科の特性にも依ろうが、1年生諸君、機械工学科の学生は、もっと活字に親しまれんことを。

II 課題読書(1・2・3年生の一般教養)

(国語科)

1. 読まれた顔振れ

1年生

角川文化振興財団の主催する、「第2回 文庫による読書感想文コンクール」に参加する形で、各種文庫に収められてある指定図書のうち、現代日本文学、93種を読ませた。

4年学科約160名について、ベスト10をあげると、

N.	本名	作者	人
1	坊ちゃん	漱石	12
2	走れメロス	太宰	9
3	人間失格	太宰	7
4	生まれ出づる悩み	有島	6
5	友情	武者小路	6
6	こころ	漱石	5
6	ジョン万次郎漂流記	井伏	5
8	杜子春	芥川	4
8	城の崎にて	志賀	4
8	鼻・芋粥	芥川	4
8	注文の多い料理店	宮沢	4

相も変わらぬ漱石と太宰のこの人気。但し、読みやすい、書きやすい観点から選ばれた傾きはあるようだ。

なお、学科ごとに見ると、仲間どうし、つまり集団心理で本を選んでいる傾きがある。

2年生

先に寄贈された新潮文庫「高校図書館用特製セット」150冊(別掲)のうち、前半75冊をM・E科に、後半75冊をC・土科に当てた。両群それぞれ約80名(80冊)中、頻度数順に上位10種は、

N.	書名	科	人
1	車輪の下	C 土	10
2	人間失格	M E	8
3	老人と海	C 土	7
4	変身	C 土	4
4	異邦人	C 土	4
4	野菊の墓	Mだけ	6
7	家族八景	M E	5
7	あいつと私	M E	5
7	銀河鉄道の夜	C 土	5
10	古代への情熱	C 土	4

このセットには文芸だけを採ってあるわけでないが、結果は、第10位を除き、文芸好みの結果を示した。「車輪の下」と太宰は昔から本校生にもてる。

3年生(C・土科)

去る4月、備えた岩波文庫ジュニア60選と同シニア70選の中から、文芸以外のものと指定した。約80人が、130種の中から51種を選んだ。ばらつきが大きく、3人以上が選んだものは、

1	ロウソクの科学(ファラデー)	6
2	ソクラテスの弁明(プラトン)	4
2	古代への情熱(ジュリーマン)	4
4	知性改善論(スピノザ)	3

他に、笑(ベルグソン)、ミル自伝、創世紀、学校と社会(デューイ)、絶対の探求(バルザック)、相対性の世界入門、などが2人ずつ(M・E科の分布は次号で)

2. 読みとられたあと

(1年生各科と3年生M・E科のものは次号に紹介する予定)

野菊の墓(伊藤 左千夫)

2M 高橋 哲也

うらやましいと思った。この話の初めのころの政夫をうらやましいと思った。身近に好きな人がいるということが、そしてその人に好かれているということが…。年

も十五歳に十七歳、月を数えれば、十三歳何か月と十五と少しというおさなさであるから、大人の恋とは全く違った。小さな小さな恋といったところであり、いやらしさがなく、読んでいてとてもたのしい。座敷を掃くと言っては部屋をのぞく、障子をはたくと言っては部屋へ入ってくる。本が読みたいの手習がしたいのと言う。ハタキで背中をついたり、耳を摘まんだりして逃げてゆく。政夫の掃りがおそくなると、三度も四度も裏坂の上まで出て渡しの方を見ている。これが民子の行動の一部。民子がのぞかない日は何となく淋しく物足らず思われ、ふらふらと書室を出て行き、一寸民子の姿が目につけば

気が落ち着く。これが政夫の行動の一部。

政夫と民子が二人で山の畑へ行くところの場面はよかった。風景の描写も美しいし、二人の行動のようすもたのしい。互にあってを野菊のような人だ、りんどうのような人だと言う。それぞれ自分の好きな花にあってをたとえているのだ。愛の告白などというようなものではないが、互いに、しっかりと自分の気持ちをあいての心の中に映し出すような行為だと思う。山で昼食をとるとき、政夫が水を汲みに行くという、民子が一緒に連れていってくれたのむ。この行為にもいやらしさなどはみじんも感じられない。これもやはり二人の年と、純粋な心があるからだろうと思う。さらに、美しい風景がその場をかざる。色よく黄ばんだ晩稲のシトリと打伏した清々しい光景。風が吹いたら溢れるかと思うほどはえんでいる綿が点々として畑中白くなっている。そこに朝日がさしてまぶしい様に綺麗だ。青一色の空に翠の松林。木の間から影さす十三夜の月。薄絹を曳き渡したように白く見える蕎麦の花。

結局この日帰りがおそかったため、政夫は学校へ行かされることになる。小雨の降る日の別れ。生涯の別れとなった別れ。親しく目に染みた民子のいたいたしい姿。物も言い得ないでしょんぼりと情れていた不憫な民さんの傍。一言の詞もかわし得ないでしてしまった永久の別れ。寂しい話は、あまり好きではない。小説を読むときには、主人公と自分が同一化されるからである。ほくは、こんな悲しい目には一生あいたくない。

学校へ行ってからも、とかく民子のことばかり思われる政夫は、多くの人の中に居て、どうにかその気持ちを紛らす。わかるような気がする。しかし気がするだけである。なぜならほくには、それほど強く思いをよせる人がいないからである。

冬期休業になって政夫が家へ帰ると、民子がいなかった。嫂がいろいろ意地の悪いことを言って、家へ帰ってしまったのだ。この嫂は前から二人について、いろいろと意地悪をしていたのだ。こんな嫁しかこなかったところを見ると、兄という人物も、たいした男ではないなどと、変な方向へ考えが向いたりしたものだ。それを止めないばかりか、政夫のいない間に民子に対してつらくあつた母についても、悪い感情を持った。初めのころはものわりのいい母と好感をもっていたものだが。

結局のところ、民子が死ぬまで二人が会うことはなかった。政夫が民子の死を知ったのは、電報によって、家に帰ってからである。民子は嫁に行き、その嫁ぎ先で死んだということだ。民子はいやだというのが、家の人をむろん親類までの希望であり、政夫の母まで、民子に対して、政夫との結婚は認めないとまで言う。民子はしかたなしに言うなりになって結婚した。母も民子の家族も政

夫にあやまる。特に母などは泣きどおしである。政夫は死ぬ前にせめて一度逢いたかったと思うが、それを口に出して言えば、母を殺す様なものであると思い、心をとります。いくら泣きわめこうがあやまろうが、民子は生き返らないのである。民子は政夫を思いつけて死んでいったのである。だいたい親などというものは、子供を無理にでも自分の思う方向へ進ませようとするものが多い。そして、子供が死んだりしてから、ああ、あの時ああしておけばよかった。こうしておけばよかった。などと思うのだ。親の無理解によって引きさかれた二人の愛は永遠に時空を越えて生きつづけていくようであってほしい。

政夫は民子の墓に野菊を植えた。その野菊は、二人の愛によって永遠に美しく咲き続けることだろう。

一真に民子は野菊の様な児であった。

可憐で優しくてそうして品格もあった。

どう見ても野菊の風だった一

人間失格 (太宰 治)

2 M 石川 勉

道化の下に隠した、人見知りとも恥ずかしがり屋とも言えない様な性格の葉蔵。彼自身に言わせるとそれは人間に対する恐怖感からなるものようだ。

彼は、本当に人間を恐れた。隣りにいる人間が、何を考えているのかわからない、と言って、気味が悪いほど気を配り、道化でごまかしたりした。

もし、この様な人間が、私の周囲にいたらどうだろう。いや、いるかもしれない。私はただ、そんな人間を見抜けないのかもしれない。人間という動物は、誰でも色々な顔を持っている。ただ、彼の場合、自分の性格に対して意識しすぎていたのだろう。他人の自分に対する評判というものを、気にしすぎていたのだ。やさしいのかもしれない。その証拠に、彼はいつでも心の中では、自分の性格を嫌い、戦っていた。

彼は、短い年月の間に、普通の人の倍の苦しみを味わった。必要以上の気づかい、むなし女との関係から起きた情死自殺未遂、その他もろもろの醜い女とのかわりあいと、そのもつれなどである。そしてしまいには、モルヒネ中毒などになってしまった彼。

彼は、それら全部の責任は、全て自分だけにあると信じた。そして自分はもう、人間失格だ、と思い込んだ。私も最初はそう思った。こんなごとばかり起している奴は、失格で当り前だと思っていた。しかし、よく考えてみると何如、彼が人間失格なのだろう。

彼の私生活は乱れすぎた。彼の犯したあやまちは大きかった。だが、その度彼は、自分と戦っていたのだ。自

分の事を反省していたのだ。思い悩んだのだ。反対に、自分のしてかした事もふり返らず、人との真の交わりについてなど考えもしない、平々凡々に暮らしている人間こそ、失格かどうか、確かめなければならないのではなからうか。

私が、この本を読もう、と思ったのは、これを読んで自殺する人がいる、ということ雑誌で読んだからである。読む前には、本を読んで自殺するなんて、馬鹿だろう、考えすぎなのだろう、と思った。でも読み終えてみると、人間の本性というものを、目の前に見せつけられたようだ。そして私にもこんな面があるなと思った所が、意外と多く見あつた。だから、そんな人間という動物のむずかしさを考える事もなく、自殺した人をけなした自分が、恥ずかしい。その人はその人なりに、自分は人間失格だと思ったのだろう。かえて、私の様に、失格だ、などと考えもしない人間の方が、本当の意味での人間失格の様な気がする。今、改めて、私という人間は、どうなのだろう、と考えさせられた。もちろん自殺する気は、全く起こらないが。

家族八景 (筒井 康隆)

2 E 庄司 順一

人間の本心っていったいどういうものなんだろうか。

S・F、といってもサイエンス・フィクションでも、スペース・ファンタジーでもない感じの小説だ。主人公の火田七瀬は「E・S・P」つまり超能力者である。彼女は精神感应力テレパシーを持った精神感应能力者、テレパスである。他人の精神を感じ人の心を読むことが出来る。とても罪深い、プライバシーの侵害などという生っちょろいもんでないとしてつもない罪を犯して生きている。しかし考えてみればとても気の毒な人のように思える。知らなくてもいいような人の心の醜く、汚い姿を、まざまざと見せつけられ、苦しみ悩み、その上、自分の能力を知られることを恐れている。それで、お手つだいさんとしてあちこち移動して暮らしている。この話は、彼女が働いた八つの家族の情景を描いたものである。

第一話『無風地帯』は、ごく平凡な中流の家庭が舞台になっている。この家族はコモン人から見れば、実に平和で明るい家族。だが、彼女が心の鍵をはずしてみると、そこは戦場である。心の底から憎み、激しくののりあい。それでいてうわべの、うわべだけの平和と均衡を保っている。ぼくが思うに、そこは、この世の地獄、むなしく悲しい世界だ。

こんな家庭に、ほんとうの心の安らぎがあるはずがない。怒りに似た感情が心の中で、うごめいているような気がする。家庭というものにはこんなものじゃないはずだ……。

七瀬は、やがて、次々とあと七家族のお手つだいさんとして、相変わらず移り住んでいった。

ぼくは彼女とともに、人の心を覗き、怒り、悩み、落胆した。善びもした。それに、人間の表と裏、立て前と本音を、見せつけられた思いもした。

人の心とは、人間のしていることは、そういう、裏と表があるのか。また考えこんでしまった。

ぼくたちは小さいとき「陰日なたのない人間になりなさい。人を信じなさい。そして信じられる人間になりなさい」そう大人たちに言われて育った。

しかし、人を信じ、だまされ、苦しむ人もかなりいるようだ。うっかり、自分を信じてくれている人を裏切り、傷つけてしまう。こんなこともあるだろう。こんなとき「心にもないことをしてしまった」よく言うことである。この前、テレビでも言っていたが、心にもないことなんて出来るのだろうか。

人は行動するとき心が動らくものだと思う。だから、心にもないことなんて、出来っこないんじゃないか。心の隅っこに、ほんの少しあるはずだ。それをいつも出さないでも、出そうとする気がなくても、ひょんなことで、出てしまうのと思う。

それほど人の心は、複雑で、わけの分からないものかと思うほど、複雑なんだろう。

人の心ってどういうものか。それは、わけの分からないもの。だから、人には、裏、表、立前と本音、というのがあって当然。いや、むしろ、表も、裏も本音なのかもしれない。

心とは、分からないもの。だからこそ、人の心を信じるのだ。ぼくは、そう確信する。そして、それは、すばらしいことだ、とも。

本の内容から、ずいぶん飛躍してしまった。それでも、これは、彼女、七瀬のテレパシーを借りて、人の心を覗き、反感を持ちながらも、「家庭」と「心」について考えをめぐらしたことだ。

この本は、ぼくにとってずいぶん大きな一冊になるようだ。

車輪の下 (ヘッセ)

2 C 玉川 雅代

主人公、ハンス・ギーベンラート。彼は才能に恵まれ、周囲の期待の中で、神学校に入学するために子供らしい遊びもせず、受験勉強に打ちこみ、見事に優秀な成績で合格する。入学後も彼は首席をとり模範生としての生活を送るが、それは彼の心の奥底から望んでいたようなものではなかったに違いない。そんな彼の生活も一人の友人、ヘルマン・ハイルナーとの友情で変わっていく。しか

変身(カフカ)

2C 赤川 卓央

しその友情さえ大人達に引き裂かれてしまう。孤独となり、自殺すら考えるハンス。故郷に帰り町の機械工になった彼は、生きる望みもなくし川に落ちて死んでしまう。才能あふれる少年にとってあまりに短いハンスの一生である。

才能あるがゆえに、純真であるがゆえに、傷つき易い少年ハンス。そんな彼の周囲は無理解で、ただ彼の才能に期待をかけるだけの人々でいっぱいであった。普通なら遊びざかりのそんな時期に、自然と戯れることを禁じ、かわりに精魂をすりへらす勉強を与えた。

どうしてそこに子どもとしてのハンスをわかろうとする心がなかったのだろうか。一番感受性が強く、傷つき易い少年時代に、ハンスの心の奥にある、自然のままの人間的な欲望や力を押えつけてしまったのだろうか。自由に、きまめに、なんの屈託もない少年らしい伸び伸びとした生活を、どうして取りあげてしまったのだろうか。この時期にすでにハンスの心の中には、やがて病んでいく遠因が芽ばえたのであろう。

ヘルマン・ハイルナーの生き方。それはハンスにとってはまるで別の世界の未知のもののような、全く新鮮なものであり、激しく心を揺さぶられるものであった。義務の生活とは比べものにならないほど有意義な、人間味のある生活であった。

しかしその友情すらも許されず、ハンスは孤独となる。まわりの圧力は二人の仲を引き裂いたのだった。

この小説を読んだ人の感想は、周囲の無理解とともに、ハンス自身へ、もっと強く生きて欲しかった、と願うものがほとんどだろう。彼の上にのしかかった大きく重い「車輪」に下敷きになるまいとする力、むしろその「車輪」を逆回転させるような力を望むだろう。私もそれを、望めるものなら望みたいと思う。しかし、子供のころから押えつけるだけ押えつけられていた彼にそれを望むのは酷である。それはあくまでも理想であろう。普通の人ならそれ以前につぶれるのではないだろうか。神学校の堅固な体系と、それ以前、以後の彼の回りの環境、勉強に進ませようとしたその為に不必要なものは拒み破棄した、そしてまたハンスとヘルマンの友情すらもこわそうとした…大きな「車輪」に。

どこの社会でも、すぐれたものに期待をかける気持ちはわかる。しかし、ハンスの周囲にいた人々は、あまりにも名誉とか虚栄心が先ばしり、ほんとうに前途ある少年として、彼の心を理解してやることができなかった。それが有望なハンスの一生をだいなしにしてしまったのではないだろうか。



カフカの変身を読むきっかけは、題のおもしろさからである。しかし、内容はというと主人公グレゴール・ザムザが一匹の巨大な毒虫となり、それに伴う家族の苦悩を描いたなんともぶきみな物語だったのです。

まず、私はザムザは、なんと心の強い人だ悪く言えば、なんと神経のずぶとい人なんだろうと思った。なぜなら、もし私が寝ていて、朝、気がついて一匹の巨大な毒虫なんかに変身してしまったら、きっと気が変になって狂い死んでしまうと思ったからです。

さて、家族の一人が巨大な毒虫になってしまった時の家族の驚きは、どんなものだったのだろうか。私は、グレゴール一家の人々を偉いと思った。なぜ偉いと思ったのかというと、一匹の巨大な毒虫になってしまったザムザを殺したり、捨てたりしなかったからである。もし私の家族の一人が一匹の巨大な毒虫になってしまったら、初めのうちは、自分の家族の不幸だから世話もやいてやるだろうがじょじょに、家族の者が一匹の巨大な毒虫に変身したという怪現象に疑念を生じて、その毒虫を殺したり、捨てたりしてしまうと思うのです。

それから、私を一番悩ませたのは、ザムザが一匹の巨大な毒虫に変身するという怪現象でした。なぜザムザは、一匹の巨大な毒虫と化したのか。ザムザには、なにかそういう素質があったのか。いや、なかった。

それでは、ザムザの生活環境が、彼を一匹の巨大な毒虫に変えたのだろうか。

彼の家族は、彼の他は三人で、両親と妹であった。父が倒産したので借金があったし両親は年老い、妹は弱冠十七歳であったためザムザは、一家を背負って働かねばならなかった。彼は、身体にむち打ちながら、進んで重労働を行っていたのでした。

私は、そのへんに、ザムザ変身の秘密が隠されているのではないかと思った。日々を忙しく過ごしてきたザムザ。ザムザの身体は異常に疲れ、その疲れが彼を一匹の巨大な毒虫に変身させる引き金ではないかと私は思った。

最後に、私が不思議に思ったのは、作者はザムザを、一匹の巨大な毒虫に変身させることによって何をあらわそうとしたのかということだ。私は、一匹の巨大な毒虫の対象はたくさんあると思う。戦争・断絶・倒産・不信・・・などの人間社会における不幸すべてを一匹の巨大な毒虫に托したのだと思う。

私たちは、また新しい巨大な毒虫を生み出さぬようにしたいと思う。あすは、私自身が一匹の毒虫に変身するのではないかという恐怖にかられながら……

異邦人（カミュ）

2土 佐藤不二夫

これは、カミュが四年という月日をかけて完成させた、不条理を追求した彼の代表作である。

この物語の主人公ムルソーは、ある日アラビア人をピストルで殺したがために裁判にかけられた。しかし、彼は母親の葬儀で涙を流さなかったという理由で、死刑を宣告された。

現在、我々が生活している世界では考えられないことである。殺人を犯した者が死刑になることはわかるが、母の死に涙を流さなかったから、死刑になるなんてことは、考えられない。それより不条理を感じたのは、殺人について裁判をしていたのに、途中でその罪の内容が変わったことである。だが、彼は抗議しなかった。もっとも彼の方にも、不条理な部分があった。それは、彼が母の葬儀の翌日、恋人と海水浴に行き、映画を見、彼女をつれて部屋へ帰ったこと……。それらのことが、検事を怒らせてしまった。その結果、彼は死刑になった。自業自得かもしれない。

母親の葬儀で、涙を流さない人間は、すべて死刑を宣告される可能性があるということは、芝居をしていても泣かないと、ムルソーの生活している社会では、「異邦人」として扱われるしかないということである。では、なぜ彼は芝居をしなかったのだろうか。おそらく、彼は嘘をつくことを拒否したからであろう。彼にとっての嘘とは、あること以上のことを言ったり、感じた以上のことを言ったりすることである。

我々は時々嘘をつく。だが、それは人をだまそうとしてつくのではない。生活を混乱させないためにつくのである。お世話がそのよい例であろう。しかし、ムルソーは、生活を単純化させようとはしなかった。彼が問題とする真理とは、存在することと、感じることとの真理であったように私は思う。

最初これを読んだ時、ムルソーという人間が、否定的で、虚栄的な人間にしか、私の目には映らなかった。しかし、読み終わってみると、私の彼を見る目は変わっていた。彼は、ひとつの真理のために、死ぬことを承知したのだ、と思うようになっていた。彼は、存在するままに生き、感じるままに生きて来た。結局それが、彼にそのような真理を植え付けてしまったように思う。

この作品を通じて、カミュは我々に、自分の犯した罪を素直に認めて、反省し、その罪の償いをするのが、人間の本当の生き方だと教えているような気がしてならない。

老人と海（ヘミングウェイ）

2土 高木 正文

この小説は、すさまじいばかりの老人の海に対する生き様が描かれている。

老人は、長い不漁に悩まされその日の生活もままならなかった。しかし、老人は、海に対する希望と自信は、失っていなかった。何よりも彼は、海を愛していたのだ。

そんなある日、老人は沖へ出てみた。小舟に乗り、たった一人で。その日も不漁で餌も残り少なくなったころ、ついに獲物がかかった。それは、今まで老人が出合ったことのないような大魚だった。

二日、三日と老人と大魚との死闘は続いた。老人は、大魚が強く引く綱を操っているため体中傷だらけだった。また体力も、もう限界にきていて骨の髄まで疲れきっていた。彼をささえていたのは、気力だけだった。彼は、幾度となく自分自身に大声で呼び掛けた。「自信をもって、元気を出せ。」と。

大魚は、何度も何度も海上高く跳ね上った。舟は、すさまじい勢いで引きずり回され、傷ついた掌に綱が食い込み、今までにないすさまじい力が両手にかかった。老人は、へさきに引き倒された。しかし、それでも彼は、その綱を離そうとしない。掌は、すっかりくずれてしまった。また、幾度となく襲ってくるめまい。その度に気を失いそうになった。が、彼は、最後の最後の力をふりしぼるようにして大魚に挑む。気力だけで。そして、ついに老人は、その大魚をしとめた。四日間にも及ぶ長い長い死闘の末ついに。

老人は、この大魚に親しみを持ち、この戦いを称えた。ほくは、このことが清々しかった。また、この老人は、生まれながらの漁師。根っからの海の男なんだなと思った。

老人は、帰る途中、舟にくくりつけた大魚を鮫に襲われた。老人は、必死で戦った。鋸を取られ、ナイフも根柢も取られても、尚それを守ろうと戦った。しかし、大魚をみるみる食いちぎられていった。港に着いた時は、頭-尾-骨だけしかなかった。老人に残ったものは、深い疲労だけだった。でもほくは、彼には、あんな大魚と戦いみごと勝ったという満足感、誇りは、きっとあったはずだろうと思う。

ほくは、この作品で、あの老人が、とうていかならずもない大魚や鮫を相手に、決してあきらめることなく最後まで、自分の限界にきてまでも全力をふりしぼり雄々しく戦った姿に、今まで気が付かなかった人間味、真の人間あるべき姿を見たように感じる。

また、このような死闘を幾度となく繰り返しても、何もなかったような姿を呈している海、この大自然の偉大

さ、厳肅さを改めて感じた。

私たち現代人は、みせかけだけの勇気にとらわれている。だから、この老人のような生き方こそ現代人に最も欠け、最も必要で、最も忘れてはならないことではないかと思った。

老人と海

2 C 石川 久美

この、「老人と海」という物語は、アメリカのヘミングウェイによって書かれた。

キューバに老漁夫サンチャゴが住んでいた。彼は、長い間不漁だった。しかしそれにもめげず、ある日、小舟に乗り出漁する。そして、彼は、想像を絶するような巨大カジキマグロを釣る。それは小舟より二フィート長い。彼は、それを手に入れるまで、まさに巨大魚との死闘だった。帰途、舟にくくり付けた獲物の血の臭いで、サメが襲ってくる。彼は、体が傷つきながらも、サメと戦った。しかし、獲物は、次々と食いちぎられてゆく……。

私は、この物語の中にリズムを感じた。最初は、のどかで寂しいリズム、中間は、激しく盛り上がるリズム、そして、最後は、静かで安定したリズム。このリズムに乗って一気に読むことができた。このリズムの中で中間の部分が好きだ。そこには、男のロマンを感じる。老人が巨大魚と死闘する部分。老人の巨大魚と死闘しながらも、巨大魚に対する愛憎が感じられる。時にはやさしさやいたり。それは、彼に巨大魚を手にする自信があったのか、それとも、一人ぼっちでいる、寂しさからなのか、私は、彼が、何か不安だったからではないかと思う。大自然の海という所で、たった一人、いつもの少年もいない。だから、この大きな獲物や、小鳥に話しかけていたのだろう。

この物語を読み終えるまで、私は、はらはらした。それは、いつさめが出てきやしないかという事だ。獲物がかかった場面からずっとだ。老人は、さめが現れ、自分の獲物がさめにねらわれている時、どんな気持ちだったのだろう。そのままの巨大魚を、だれかに見せたかっただろう。やはり、一番初めには少年に。彼は、ここでも不安だったろう。この傷ついた体、武器もない。しかし、彼は、戦った。どんなに条件が不利でも、彼は、気力だけで戦った。自分の夢を物にするために。

では、老人とは、どんな人だったのだろうか、始めは、どこにでもいる老いぼれた漁夫と思った。しかし、一步、海に出れば、怖い物知らず、いや、海の怖さをよく知っているからなのか。そして、案外、小柄で、筋肉が付いているが、どこか弱そうで、日に焼けて褐色を帯びている体。目には、夢をおう若者のように澄み輝いている。やさしさを持っていて、厳しい面もある人。

私は、この物語を読んで自然の厳しさと、残酷さを少し知ったような気がする。

最後に、私は、老人の勇気をたたえる。

ゴッホの手紙 (ゴッホ)

3土 高橋 幸也

ヴィンセツト・ヴァン・ゴッホといえば、絵画の後期印象派の代表的画家として、知られている。このゴッホを、ぼくが初めて知ったのは、小学6年のとき、当時の図工の教科書によってである。この時の感動を今でもよくおぼえている。あの強い色彩を。これ以来、ゴッホのファンになってしまった。ゴッホは、生きている間は絵が売れず貧しい生活をおくった。現在よくある画家の貧しい像というのは、ゴッホからきているのではないだろうか。今では、ゴッホといえば、広くもてはやされている。しかし生きているときは、非惨である。早い話しが、貧しい生活の中で、気が狂って自殺してしまったのだ。けれども、ぼくはこのゴッホが好きである。

さてこのゴッホの手紙であるが、まず第一印象は、日本の手紙とはまったくちがうというところである。それは当然のことなのかもしれないが、自分が書いている手紙などは、かなりちがう。初めに、あいさつなどをしないで、いきなり本論にはいっているのが、かなり多かった。あいさつしているものでも、くれた手紙に礼をいうくらいである。そして物事や自分の意見を、断定的にいっている。ぼくらが書く手紙では、考えられないことだ。ぼくらは、手紙を書く時、出来るだけ、自分の意見を相手におしつけたりすることをさけるものだ。ゴッホの手紙の場合、おしつけているとはちがうが、かなり文学的で、ソクラテスやキリストをとりあげてみたり、やりたいほうだいのことを、書いている。しかしこんな手紙をもらっても、けっして頭にこないではないだろうか。ゴッホが、本当にまじめに書いたことがすぐにわかるからだ。それから、なんとなくぎこちないが、相手に対して思いやりも十分感じられる。これらの手紙には本当に心がこもっていると思う。

ところで、手紙の中に日本のことを書いた部分が、何か所があった。印象派が、日本のうきよ絵の影響を受けた話しはよく聞くが、ゴッホの場合、特にそのようだ。そして、日本に対して、かなりあこがれを持っていたようだ。美しい風景をよく、日本にたとえていた。ぼくたちとしては、うれしいことだ。さてこれらのほとんどの手紙の終りの部分に、『握手を送る』と、書いている。このことばが気に入ってしまった。ぼくも、これから書く手紙にこれを書こうと思っている。

最後に、手紙文を読むのは、今回が初めてで、なれないせいかかなり苦労した。読んでいてかなり疲れた。目

分が手紙を受けつつもりで読まなければならないのだから、なかなかできない。今回は、そういうこともあって、1冊しか読めなかったが、近いうちにこの2冊を読んでみたい。

この本を読んで不動の信念と限りない努力というのがいかに大切であるかということがわかった。これからは、シュリーマンの語学の勉強法なども見習って、本で読んだことを少しでも自分の生活の中に役立てたいと思う。

古代への情熱（シュリーマン）

3土 青天目慎示

シュリーマンはトロイヤ、ミュケーナイなどの古代遺跡を発掘し歴史上に残る業績を残したわけだが、その偉大な業績を残すうえで彼を支えたもの、それはホメロスの描写が歴史的事実だったということを感じた不動の信念であったと思う。シュリーマンは少年時代、父からもらった本のトロヤ戦争の物語を読んだ。彼はそれを読んで必ずトロイヤがあると信じ、いつかそれを発掘するのだと決心する。これを読み私は心からそれを求め探す者には、必ずや神の助けがあるというイエスの言葉、「求めよ、そうすれば与えられるであろう。捜せ、そうすれば見いだすであろう。」というのを思い出し、まさにそのとおりだと思った。

私たちを含め今の子供たちは現実を見つめ、クールに生きているとはいうけれど、もっと夢をもって夢を追いかけて生きてみていいんじゃないかと思う。毎日を打算的に生きていたのでは楽しいはずの人生も暗くつまらないものになってしまい、最後には自殺というような最悪の事態にもなりかねない。やはりシュリーマンのように大きな夢をいだき、それを夢に終わらせるのではなく地味な努力の積み重ねによってその実現を目指す。すばらしい生き方ではないか。

必ず、栄光の裏には血の出るよう努力がつきものである。シュリーマンにおいては、なんとフランス語、オランダ語を始めとしておよそ十か国語を完全にマスターしたのであった。私たちは英語を始めて6年目になるが、だれ1人として英語を自在に話せる人はいないだろう。私などはそれほど努力もせずに英語はむずかしいものだからできなくてもしょうがないと思っていたが、シュリーマンの努力に比べればぜんぜん問題にならない。自分自身がはずかしくなってしまった。シュリーマンは事務所働くようになったがたいそうひどい貧乏暮らしだった。しかし彼はその境遇にけって妥協しなかった。彼は、「はじめの境遇と、努力すればそこから抜け出せるというたしかな見通しほど勉学に拍車をかけるものはない。」と言って時間を見つけては勉強するのであった。シュリーマンの言った言葉を読んで、私はまだまだ自分自身に甘く努力が足りない反省させられた。シュリーマンには「努力、天才をしのぐ。」という言葉がまさにぴったりだと思った。

ミル自伝（J・S・ミル）

3C 青木 和宏

この自伝を読んで驚いたことは、ミルが少年期に読んだ本の数である。それと同時に、その読んだ時期や順序が刻明に述べられている点である。もしミルの記憶のみによって書かれたものとすれば、ミルはおそろしく記憶力のよい人間だったのだと思う。

このことに加えて今なお心に残っているのは、自伝の書きだしである。自伝を書き残す動機を説明していて、彼が父からうけた早期教育の記録と、彼の心的発展の歴史とを発表することが多少ともひとに興味もあり有益であると思われるし、またその知的・道徳的発展の途上で他の人たちからうけた恩義に感謝の意を表明したいからである。という3つの理由とともに、「一般読者に興味があり得るだろうなどは、さらさら考えない。」と述べている。このように他の自伝に見られないような書きだしが印象強く残っている。

このことわり書きは、単なるアクセサリ的なものではないと思う。そして、自伝を読むにつれて冒頭にかかけられた3つの動機に忠実でありすぎるほど裏実であることがよくわかる。

自伝を読むにつれて不思議に思うことがある。それは、父に関する叙述が詳しくかかっているにもかかわらず、母や弟妹についてはほとんど何の記述もない点である。これは、彼女が知的ですぐれた人ではなかったことやミルの幼時の母についての思い出が心温まるものではなかったのだろう。

それにまして、決して裕福といえぬ家庭の中で9人の子供を育てなければならなかったためミルに対して優しき母たることを求めるのは不可能だったのだと思う。だから、自己の心的発展という観点から見た場合、母に関する記述を除いたのだと思う。

又、1851年のミルとテイラー夫人との結婚が、ミルの母や弟妹との両者に感情の食いちがいが、かなり強く働いているように思われる。

ミルは感情の欠如したきわめて知的な人間であったというイメージがあるが、しかしこれは事実でないと思う。

種々の障害にもかかわらずテイラー夫人との長い間交わりをつづけ遂に結婚するにいたるまでの過程などをみれば、ミルはきわめて感情の強烈な人間であったと思う。にもかかわらずミルはあくまで知性的な人間であった。

ミルの思想や著作(特に『自由論』)に与えたテイラー夫人の影響も又大だと思ふ。ミルは、論理学・哲学・倫理学・社会問題・評論などこのように広汎にわたる文筆活動をしていた。

しかしミルはこれらを生業としていたのではない。

1823年から58年にいたるまで東ドイツ会社に勤務し、大部分はこの勤務の余暇になされた。青年期のミルは、1832年の選挙法改正前後に活動した哲学的急進派の最も活動的なメンバーの1人であったし、又晩年には下院に選出されて、67年の選挙法改正やアイルランドの土地問題・アメリカ南北戦争問題などに尽力した。

ミルの誠実な努力から、このような多方面にわたる活動や業績が生まれてきたのだと思ふ。

最後にミル自伝全体についていえば、これは単なる生活の記録や回想ではない。たしかに伝記的スケッチにはちがいない。しかしそれは限られた観点からみて有意味と考えられたかぎりでの伝記的事実の記録だと思ふ。

学校と社会(デューイ)

3土 新田 勝

私が、この本を読もうと思った動機として、本校が通常の6・3・3・4制に対して、6・3・5制という一種独特の教育課程をとっているため、教育また学校とは、社会に対してどうであるべきかということを知りたいと読もうと思った。しかし、内容としては、主として初等教育に対する心理的よび目的というものであって、著者が、19世紀末期の村岡小学校での感想めいたものだった。

私がいま1人の学生として抱いている不安に、学校で得る経験、知識が果して、実社会で応用できるか、また、私達が学んでいる高度な数学などを使う時があるのだろうかということである。はっきりいって、日常生活、実社会に応用することはできないと思ふ。これは、教育における浪費であると思ふ。私が痛切に感じることとして、机の上での教育を重点としている現在の教育ではいけないと思ふ。肌で覚える実習をもっと重視するべきではないか。

この本では、初等教育について書いたものであるから、私のそれに対する考えを述べてみる。私は、初等教育で最も大切なのは、協的、相互扶助的な生活の仕方ではないと思ふし、生徒達の中に相互依存の意識を養い育てていくことが最も重要なことではないかと思ふ。学問うんぬんということは、中等教育になってからでも十分だと思ふからである。

私達高専生は、目標というものがさほどないためか、学習意欲がなすすぎると思ふ。進級できなくなるからテ

スト前ぐらいはやってみようかというものである。刺激剤となるものが必要なのである。これが高専教育に対する現在の1番の問題だ考えるのである。

最後に、私が思う教育とは、実社会で通用する学生を育てるべきだと思ふ。そのためには、学生自身に自信をもたせるためにも、実験においても、新しい真理もしくは新しい方法を考察させ、それを応用させていく、自由研究というものを行なわせるべきである。また、企業が行なっていることの小規模のものでもよいから、それを課業に取り入れることを試みる必要があると思ふ。いわゆる、実社会への掛け橋になってもらいたいのである。

近代民主主義とその展望(福田 歓一)

3C 平 恵 久 子

戦後日本は軍国主義から民主主義へと変化しました。第二次世界大戦直後は、民主主義という言葉が輝かしい光に包まれ強いアピールを持っていました。しかし、今日では憲法が変わり民主主義は単なる理想や運動ではなくて体制になり、その体制下において保守党の独占的な権力が続いてきて、その中で腐敗は何度もふき出し民主主義という言葉はひどくむなしくなると、はじめのアピールを失ってしまったようです。

民主主義といわれて、身近にあるもので連想されるのは選挙です。例えば、クラスの委員長を選ぶ時に多数決による選挙で決めています。私の読んだ本から得た知識によりますと、多数決は強く民主主義と結びついているが、それが必然的な結びつきを持っていると簡単に言うことはできないということです。その理由の1つは、多数決はもともと合議体の意志を決定する方法であるからであり、もう1つは、すべての人間の自由平等という価値原理と矛盾しないようにしようとすると、それを満足させるものは全員一致しかないということです。単なる多数決が制度化されたのは、どうしても意志決定の必要な場合に、それに即答できるような便法として受け入れられるようになったのです。つけ加えるならば、民主主義では治者と被治者が同じであるというのが自治です。ギリシアのポリスの場合ですと、治める者と治められる者の同一を保障する方法は抽選でした。

近代の民主主義がその舞台としております国民国家は、はるかに大きな政治社会ですから当然のように政治の動きそのものも複雑になります。自分の身の回りの日常経験の枠ではとても全部を理解することはできません。そういう場合に、いちばん簡単な判断方法は、いいか、悪いかのモラリズムです。大衆が大きな不安にとり巻かれてモラリズムが低下したとき、荒唐無稽のデマゴグ(扇動者)が大衆の支持を得るチャンスとなります。例

えばナチスがその例です。恐慌による生活不安のさなか、こんなひどい状態になったとはユダヤ人のせいだと単純明快に割り切って見せて、ナチスが権力を握ればすべてよくなるという訴えかけで大衆の支持を得たことが、あのよう非情な行為に及んだ契機だったのです。ここに民主主義の本当のことわざがあるのかもしれませんが。

私はこの本の最初の1ページを読んだとき「失敗したな」と思いました。しかし、身近なことと照らし合わせながら時間をかけて読み進んで行けば、全くわからないことはありませんでした。

民主主義が、リンカーンの演説の「人民の、人民による、人民のための統治」のようになるために、どんなに立派に制度化されても、1人1人の人間の資質とモラルが向上しなければ、その制度は意味をなさないとということが認識できました。そして、まさにそれが民主主義なのです。

相対性理論の世界 (J・A コールマン)

3 C 遠藤 佳伸

物理の授業の始めに習った力学がむずかしくて、物理がきらいになった。今までは物理に対して拒絶対応を示すようになってしまった。物理は自然科学の中心的な学問だ。私は化学科だからいつかは、自分から進んで学ぶようにしたいと思っていた。でもまさか今年の夏休みに、きっかけをつかむとは思わなかった。

どの本を買おうかなあと、まよっていると「相対性理

論」という、なかなか、かっこういい題の本が目についた。相対性理論で知っているのは、アインシュタインが発見したことくらいだが、おもいきって買ってしまった。

初めに、あの偉大な地動説を唱えたガリレオについて、「ガリレオの失敗」という節があった。これは中世、光速を有限と考えるガリレオの一派と、無限なものとするデカルトの一派があった。そこでガリレオは、5キロメートルはなれた所に、桶をかぶせたランプを持たせた人をおいて、むこうのランプの光が見えたらこちらのランプの桶をもち上げ、それを数回繰り返して光速を測定したという。これは人間の反応時間を考えてないことになるので、まちがっている。どんな偉い人でもまちがうんだなあ、人間なんて、たいした変わらないもんだと、思った。

この本を読んでいくと、不思議なことばかりでくる例えば、スピードを出す物質の長さが縮んで質量が増える。光速に近づくとも時間が遅れる。こんなことは信じられないと、思った。中学で「質量不変の法則」を習ったのに、質量が変化するというのだ。しかし、実際に証明もされている。

読んでいくうちに、不思議も不思議でなくなり当然に思われるようになる。するとまた不思議なことがおこってくる……と、いろいろないつのまにか読んでしまった。

なんとなく「物理」も好きになれそうである。不思議が当然となる魅力に。もっとくわしい相対性理論の本を読んでみたいと思った。

よもやまのはなし

- 長塚節の歌碑が赤井薬師境内に建った。(8月23日) 節(たかし)1879～1915は歌人として「鍼(はり)の如く」また農民文学の代表作「土」の作者。明治39年7月、平に來て泊る。残した歌は、赤井獄とさせる雲の深谷に相呼ぶらしき山どりのこゑ
- 星新一氏が自著「そろえと100万円を植田図書館へ(11月初)」「ポッコちゃん」その他のショート・ショート作家として高校生に人気のある氏の亡父(星一氏)は製菓業の成功者で星薬科大の創立者、いわき市錦町の出身。

- 年に一回の読書週間 10月27日から。とっておきの読みたい本をどうぞ。

◦新刊本の値引きの動き

書籍や雑誌は、再販制度によって定価販売が一律に守られてきたが、10月1日から出版社の考え次第では値引きもできるようになった。この動きは徐々に広がってゆく見通し。やがて、「この本ならA書店よりB書店が安いよ」という、えり好みと競争の時代も?

新着図書目録

※印は図書館。他は各教育の研究室に所在するものを分類別受人順に記載

総記

朝日新聞刷版 昭和55年5月～7月号
 明日新聞社
 角川世界名事典 ラールス 角川書店
 岡倉天心全集 2 4 平凡社
 日本新聞年鑑 '80 昭和55年版 電通

東洋文庫

379 今昔物語集 9 平凡社
 380 室町殿物語 1 同
 381 甲子夜話続編 5 同
 382 西陽雜俎 1 同
 383 今昔物語集 10 同
 384 室町殿物語 2 同

世界の名著

15 プロティノス・ポルピュリオス・プロクロス 中央公論社
 20 トマス・アキナス 同
 37 アダム・スミス 同
 40 フランクリン・ジェファソン・マディソン・トクヴィル 同
 41 バーク・マルサス 同
 46 コント・スペンサー 同
 47 ランケ 同
 71 マリノフスキー・レヴィニストロフ 同
 75 ヤスパース・マルセル 同

人類の知的遺産

4 孔子 講談社
 22 イブンハルトゥーン 同
 65 レーニン 同

紀田肇 一

黄金時代の脱書法 経中社

哲学

キルケゴールの講話遺稿集 8 校報堂出版
 日本仏教基礎講座
 1 奈良仏教 雄山閣
 日本哲学思想全書
 10 神道論 キリスト教論 平凡社
 11 教論集 同
 12 佛論集 詩論集 國語論集 書論集 同
 梅原猛 仏教の思想 上下 角川書店
 山田孫一 考える星 弥生書房

歴史

国史大辞典 2う～お 吉川弘文館
 角川日本地名大辞典 11 埼玉県 角川書店
 空から見た京都 日本交通公社
 NHKブックス
 365 環境考古学事始 日本放送出版協会
 明治大正図誌
 8 中央道 筑摩書房
 明治文化史
 4 思想言論 原書房
 7 文芸 同
 日本地誌
 1 日本総論 二宮書店
 地厚一他
 地図の風景 関東編 1 東京 神奈川 せしえて
 近畿編 1 京都 滋賀 同
 同 Ⅱ 大阪 兵庫 同
 日本の山河
 19 天と地の旅 奈良 国書刊行会
 20 岡 兵庫 同
 日本歴史地名大系
 36 山口県の地名 平凡社
 日本庶民生活史料集成
 29 和漢三才図会(二) 三一書房
 京大東洋史辞典編纂会編
 新編東洋史辞典 東京創元社

社会科学

地域経済総覧 1980 臨時増刊 東洋経済新聞社
 英語教育史料
 1 英語教育課程の変遷 東京法令出版
 2 英語教育理論 実践 論争史 同
 3 英語教科書の変遷 同
 4 英語辞書 雑誌史ほか 同
 5 英語教育事典 年表 同
 会田雄次著作集
 5 勝者の条件 敗者の条件 講談社
 6 日本人の忘れもの 表の論理 裏の論理 同
 10 ルネッサンスの美術と社会(1) 同
 西江有之
 サルの籠 ヒトの籠 朝日出版社
 内村剛介
 ロシア無類 高木書房
 村松隆 中国三千年の体質 同
 朝日新聞社編
 '80 民力 朝日新聞社
 P H P 研究所編
 数字で見る日本のあゆみ P H P 研究所
 宇校研実践講座
 1 教育課程編成の基礎研究 第一法規

自然科学

化学大辞典
 1 アイウエ 共立出版
 2 オカキ 同

3 クケコサ 同
 4 シ 同
 5 スセントラチツ 同
 6 テトナヌメノ 同
 7 ハヒフラ 同
 8 フリヘホマ 同
 9 ミムメモヤユラリルロン 同
 10 付録 英文索引 化学式無機化合物索引 同
 池田央 調査と測定 新曜社
 Rブランド
 科学技術者のための英文ポリッシュアップ 培凡館
 前田渡 現代グラフ理論の基礎 オーム社
 レオン・ブリュアン
 相対性理論の再検討 講談社
 吉田正太郎
 カメラマンのための写真レンズの科学 地人書館
 R.Goldblatt
 Topoi The Categorical Analysis of Logic North-Holland
 J.K.Haken
 Gas Chromatography of Coating Materials Dekker
 Hideyuki Matsumura
 Commutative Algebra Benjamin Madan M Gupta
 Advances in Fuzzy Set Theory and Applications North-Holland

工学・技術

土木機材事典 産業調査会
 1978年宮城県沖地震調査報告書
 土木学会東北支部
 技術文献調査資料 Data No.K-445 河川における土砂輸送問題
 特許技術資料センター
 機械工学 SI マニュアル 日本機械学会
 AppleIIと文アップルテクニカル・ハードマニュアル 日本ソフト&ハード社
 BASIC説明書 ACOS-6 リモート処理管理 NEC日本電気
 タイムシェアリングライブラリ説明書
 TSS/IB-6 数値計算編 同
 同 統計計算編 同
 最新C-MOS IC規格表 '80 CQ出版
 最新リニアIC規格表 同
 横1968~1975 土木学会
 廃棄物の利用と清掃技術1980
 環境行政調査会
 建設環境法令必携 建設環境調査会
 道路ハンドブック 建設産業調査会
 土木用語辞典 校報堂出版
 都市空間の回復 学陽書房
 改訂 防災調断池技術基準(案)解説と設計实例 日本河川協会
 昭和55年度電子通信学会通信部門全国大会講演論文集 分冊1,2 電子通信学会
 日本コンクリート工学会編
 コンクリート便覧 校報堂出版
 テルメア

土質力学 基礎編 応用編 丸善
土橋忠則
測量計算の基礎演習 東洋書店
測量試験問題研究会編
実力養成1 測量士補受験対策問題解説 学隆社
同 2 同
原口雄 測量士試験要点例解 税務経理協会
西上虎治 最新実用曲線設置法と曲線表 工学出版
吉田信一
ステップ方式による測量演習 山海堂
黒杉博 測量士補受験ポケットブック オーム社
浜野毅 レポート報告書の書き方 日本実業出版社
小野高麻呂
新ポンプ入門 ビジネス社
堀川三郎編 無機工業化学 化学同人社
M. J. Rabins 新測と力学系 コロナ社
佐賀亦男 ジャンホ・ジェットはどう飛ぶか 興誠社
P. D. Dunn ヒートパイプ 学社社
S. W. Chi ヒートパイプの理論と応用 ジェテック出版
富沢祐 計測工学1~3 南北出版
古屋茂地 応用数学1.2 大日本図書
和田茂博 要約と例解 計測 制御 市ヶ谷出版
和田尚 工業計測演習 工学図書
富沢祐 新編 計測管理 南北出版
土木学会編 第35回年次学術講演会講演要録1~5 土木学会
フック・ブレイ 岩盤斜面工学 朝倉書店
石原研一 土質動力学の基礎 丸島出版会
成岡昌夫 ニューマークの数値計算法 技報堂出版
内藤武 浸透機入れの実際 日刊工業新聞社
日本鉄鋼協会編 鉄鋼規格便覧 地人書館
高見寛 開発と水文環境アセスメント技報 丸島出版会
丸山弘志 鉄道の科学 講談社
グィ・エヌ・イワノク 金属疲労の基礎と破壊力学 現代理工学社
山田宏昭 マトリックス法材料力学 培風館
佃 勉 精解 機械学の基礎 現代理工学社
池孝三 マイコンを楽しむためのBASICS マスター 学習研究社
柳井久彦 集積回路工学(2) コロナ社
横井与次郎 マイクロコンピュータ基礎技術マニュアル ラジオ技術社
同 活用マニュアル 上 下 同
後藤一雄 木構造の計算 丸島出版会
吉川和広 地域計画の手順と手法 森北出版

機械技術教育研究会編
万力の製作 機械工作総合実習 実教出版
Secotoolsab
切耐データブック 工業調査会
平野道 技術英文のすべて 丸善
脚本辞三
耐震工学 オーム社
守屋喜久夫 地震災害の防止と対策 丸島出版会
新田亮 よくわかる構造力学の整理の演習 学隆社
土質工学会編
土と構造物の動的相互作用 土質工学会
村上正 構造力学例題演習1.2 コロナ社
構造工学シリーズ
2 マトリックス構造解析法 科学技術出版社
3 有限要素法 同
6 有限要素法の数値計算 同
7 構造物の動的解析 同
耐震設計シリーズ
1 耐震計算法 丸善
3 構造物の強度と変形 同
4 構造物動的解析 同
耐震設計シリーズ応用編
構造物の動的設計 同
土木学会編
1 土木計画学の成立と背景 技報堂出版
2 土木計画学の領域と構成 同
3 土木計画学における予測と計量化 同
4 土木計画学における最適化 同
土木工学大系
10 材料工学2 基礎 彰国社
十貫工字基礎叢書
5 土の応力伝播 丸島出版会
9 斜面安定 同
新体系土木工学
30 特殊コンクリート 技報堂出版
33 鉄筋コンクリート構造物の設計と施工 同
43 橋梁上部構造 同
45 基礎工(1) 同
51 土木測量 同
66 鉄道(1) 同
67 同(1) 同
70 トンネル(1)山岳トンネル 同
75 ダムの設計 同
82 港湾施設設計 同
97 契約 積算 同
I. D. Rattee The Physical Chemistry of Dye Adsorption Academic Press
Mario Paz Structural Dynamics V. N. Reinhold

産 業

村上彰男 赤潮と富栄養化 公害対策技術研究会
増廣増郎 図解土地家屋調査士試験のための法手続き 早わかり 山海堂
小泉製薬特編 英和単位小事典 ジェパンタイムズ
落合孝幸 日本のテレビ企業 実業之日本社

芸 術
渡辺良正 日本の祭り サンケイ出版
手嶋暁 スポーツ障害とテーピング 不味堂出版
日本古寺美術全集
5 興福寺と元興寺 集英社
新修日本絵巻物全集
30 直幹申文繪詞 能恵法師繪詞 因幡堂
藤紀 繪巻阿弥陀尊記 不動利益藤紀 香
田宗廟藤紀 角川書店

語 学
現代漢語詞典 竜印書館
日本語大辞典 ささへしよ 小学館
同 しよたへたくん 同
橋本文夫 ドイツ語と人生 三修社
尾関説 現代独作文の実際の研究 同
Children's Dictionary Houghton Mifflin

文 学
有島武郎全集3 筑摩書房
島尾敏雄全集2 晶文社
山口裕子 とくと我を見たまえ 若松綾子の生涯
中野重治 わが生涯と文学 筑摩書房
郭茂信 楽府詩集 第1冊~4冊 中華書局
ライブ・エス・パ・アナセン かみさんは女じゃやない 信成社
豊田林 母ふたりの記 三笠書房
山田孝雄 運歌概説 岩波書店
グアジニア・ハミルトン 偉大なるMC 同
ウィリアム・マイン 闇の戦い 同
ウィリアム・コーレット エデンの門 同
大江健三郎 持続する志 文芸春秋
黒井千次 美しき画 北洋社
岩城之徳 石川啄木 桜楓社
亀井圭 ガダルカナル戦記1~3 光人社
ロマン・ロラン 6 贈せられたる魂1 みすず書房
7 同2 同
25 芸術研究6 同
新潮現代文学
3 梨の花 ある楽しさ 新潮社
45 雁の寺(金)金閣炎上 同
50 白い巨塔 同
54 日本三文オペラ 夏の蘭 同
59 遠い声 比叡 同
76 フランドルの冬 夢見草 同

灯火に親しむべきの本(新着書から)

- 159 考える董一夢と思索のノート
串田孫一 弥生書房
生きるとは、考えるとは？日々の悩み苦しみに揺れる一本の葦に静かに語りかける人生書。
- 291 環境考古学事始 安田喜憲 NHK ブックス
古堆積層中の花粉分析により、縄文文化をナラ林文化と捉える新学説など、先史環境と文化の総合的探求。
- 302 中国三千年の体質一孔子から現代まで
村松 暎 高木書房
近代化をなし遂げたと称する共産主義中国の主張の中にも伝統的な中国的思考の絡み合いを探る。
- 573 和算以前 大矢真一 中公新書
日本人の古来の数観念、そろばん伝来以前のわが国の数学など未開拓の日本数学史を掘り起こす。
- 573 結び目の謎 額田 巖 中公新書
電気技術者が、電線の接続の研究から発して「結び」の美・知・神秘から犯罪鑑定まで謎多い糸を解く。
- 910 とくと我を見たまえ 山口玲子 新潮社会
津戦争で孤児となり、のち名作「小公子」を明治社会に紹介した若松賤子こと巖本嘉志子の清い生。
- 916 ガダルカナル戦記 1, 2, 3
亀井 宏 光人社
太平洋戦争の集約された戦場の島で果敢に戦い、飢餓と熱帯病に朽ち果てた無名日本兵士の痛恨。

読書感想文でアメリカへ？

- 第 13 回 オートスカラシップ小論文募集の紹介
- 設問 — 一冊の本 一曲のうた (他に「友だち」「私にとっての日本」も)
- 長さ — 400 字詰め原稿用紙 10 枚前後
- 資格 — 高等学校生および高専 1 ~ 3 年生
- 締切 — 55 年 12 月 31 日
- 送先 — 〒 100 - 31 東京国際郵便局私書箱 5161 号 サンケイ新聞社オートスカラシップ事務局
- 入選 — 10 名、文部大臣賞状と 3 月中旬アメリカ研修旅行 10 日間
- 詳しいことは、送先に問い合わせてください。